

宇和島市における癌治療と予防法の一考察

1年2組 渡辺 愛佳 1年2組 森中 沙耶
1年2組 山崎 莉来 1年2組 山下 晴風
1年2組 山田菜々美 1年3組 須藤 遥
指導者 山下 孝文

1 課題設定の理由

現在、日本人の死因で最も多い病気は癌であり、二人に一人はかかる病気と言われている。日本人にとって身近である癌は宇和島市では、治療法、予防、患者さんの心のケアはどのような対応がされているのか疑問に思いこの課題を設定した。

2 仮説

癌患者数は年齢が高いほど多いことから、高齢化が進んでいる宇和島市は癌患者に対する治療法の対応は充実しているのではないかと仮説を立てた。

3 研究の方法

- (1) NPO 法人愛媛がんサポートおれんじの会の方にインタビュー
- (2) 病院訪問
 - ア 市立宇和島病院
 - イ JCHO 宇和島病院

4 結果と考察

- (1) NPO 法人愛媛がんサポートおれんじの会の方にインタビュー
 - ア 患者さんの不安
 - ① 髪の毛が抜けるのがつらい。
 - ② 抗がん剤がつらい。
 - ③ 励ましの言葉は、言わない方が良い。「お変わりありませんか？」が定番である。
 - ④ 仕事はやめない方が良い。「癌」だということを言わなくていい。
 - ⑤ 小児がんの母親はつらい。
 - イ おれんじの会の取り組み
 - ① 定期的に県内各地で講義をひらいている。
 - ② がん経験者やその家族同士で話す場を設けている。(不安や悩みを共有するため)
- (2) 病院訪問
 - ア 市立宇和島病院
 - ① 癌患者の年齢層は60歳以上が68%で一般の病院より平均年齢が5歳高いということが分かった。男女の割合は6:4で大体半々。近辺では癌患者数が最大である。また、癌患者は患者数全体の20%を占めており、これは宇和島市で最も多い数値である。病院の施設作りは光がたくさん入るように見渡しが良くなっており、リハビリができるように廊下を

広くして、居心地の良さを重視している。多くても四人までの部屋にし、ベッド周りの工夫をした。

- ② 患者一人ひとりの意見を尊重している。
- ③ 病院食にも気を使っている。
- ④ 癌を中心として取り扱っているが、最先端技術は用いていない。
- ⑤ 告知は必ずする。
- ⑥ がんについてのパンフレットを置く場所を設けている。

イ JCHO 宇和島病院

癌患者は、年間30～40人。若い人は四国がんセンターに行くため、高齢者が多い。南予にはATL（成人T細胞白血病）患者が多い。南予には治療法を先生に任せる人が多い。治療法は、手術・ホルモン療法・化学療法である。外科が取り扱っている癌は血液系のもの。多発性骨髄腫の手術をしている。癌患者が普通に日常生活を送れるように、医師、看護師、スタッフ、家族がサポートするのが大切。患者さんと医師との信頼関係を築くため病名は、100%告げる。最先端技術は取り入れておらず、緩和療法を行っている。日常生活送れるようにサポートしている。大きな手術はあまりしない。

5 まとめと今後の課題

市立宇和島病院もJCHO宇和島病院も最先端の治療法は取り入れておらず、外科的処置は市立宇和島病院が大半を担っている。上の結果から、宇和島市の癌治療の中心は、市立宇和島病院である。また、宇和島市の病院では、癌患者の年齢層は一般の病院に比べて平均年齢が5歳高いという傾向が見られた。宇和島市の2つの病院では最先端の治療を行うよりも、患者が快適に過ごすことに重点を置いている。このことは、高齢の患者が多いという宇和島市の特色に準じている。

予防法の面では、癌は2人に1人になると言われているほど身近な病気であり、完全な予防法はない。そのため、私たちには癌を身近に感じ、癌について積極的に知ることが必要であり、過疎化が進み癌治療の方針が最先端を取り込むのではなく、患者1人1人にあり、地域とも密接している宇和島市の私たちは気軽に癌について知ることができる。癌サポートの機関を使うことも大切である。

謝辞

本研究を進めるにあたり、調査協力をいただいた以下の機関の方々に感謝申し上げます。

NPO 法人愛媛がんサポートおれんじの会

市立宇和島病院

JCHO 宇和島病院

参考文献

- ・厚生労働省「平成22年人口動態統計」 <http://www.paci-gan.com/hituyo/957/>